

この事例の行為について

- ・室内履きに鈴をつける行為や「いい加減にして」と大きな声で注意する行為は、高齢者の尊厳を傷つけたり、威嚇的な言動と捉えられるため、**心理的虐待**と考えられます。また、動かないで座って待ってて！』という言葉で行動を制限すること（スピーチロック）も心理的虐待と考えられます。
- ・出入口のカギを鍵を閉め、高齢者を出られなくする行為は身体拘束3要件を満たさない身体拘束にあたり、**身体的虐待**と考えられます。
- ・帰ろうと出入口の扉をガタガタしたり、帰りたと訴えているのに放って置くことは、高齢者の権利を無視した行為であり、**介護・世話の放棄・放任**と考えられます。

防止のためのポイント

<個人でできること>

●自分のケアを振り返ってみましょう

- ◆身体拘束と考えられる言動について振り返る
 - ・ベルトや柵、つなぎ服を着せる、ドアに鍵をかける等、
 - 物理的に行動を制限する⇒フィジカルロックは、身体拘束**であり、「緊急やむを得ない」場合を除いて、高齢者虐待にあたる
 - 言葉によって行動を制限する⇒スピーチロックは、身体拘束とは言い切れない**
 - ・本事例のように「イライラして大きな声で」怒鳴った場合、心理的虐待と捉えられる可能性が高い
- ◆高齢者が「帰りたい」と訴えることに対するアセスメントを丁寧に行い、対応を検討する
 - ・「帰りたい」理由は何か、あるいは施設にいたくない理由はないか等を詳細にアセスメントする
 - ・行動を観察し、見守る方法を検討する
 - ・一人で対応することは困難なため、他職員に協力を求める
- ◆虐待や虐待に繋がる言動を理解し、行動する
 - ・高齢者への言葉や態度について、尊厳を傷つける言動になっていないか考える

<チームでできること>

●身体拘束の正しい知識を共有し、身体拘束をしないための取り組みを検討しましょう

- ◆身体拘束に関する規定や考えかたを理解する
 - ・どのような言動が身体拘束にあたるか
 - ・身体拘束による弊害（身体的弊害・精神的弊害・社会的弊害）について
 - ・「緊急やむを得ない」場合の要件について（例外3要件（切迫性・非代替性・一時性）をすべて満たし、必要な手続きを行い、記録に残すこと等）
- ◆どうすれば身体拘束をしないでいいか 身体拘束をしないための原因やケアの方法をチームで検討する
 - ・例えば、「ひとり歩き」しなければ、身体拘束しなくて済む場合、ひとり歩きの原因を確認（見当識障害はないか、不安やストレスはないか、気になっている事はないか、認知症をはじめとした病的状況（転倒して頭を打った等）はないか等）し、「怒らず」「興味を持つことに気をそらす」等、チームで検討する
- 高齢者を見守る体制を検討しましょう**
 - ・一人の職員に過度な負担がかかっていないか確認し、チームメンバーで協力して身体拘束を必要としない状況や環境を目指す

<組織でできること>

●「身体拘束」について学ぶ機会を設けましょう

- ・身体拘束に関する学習の機会を定期的に設ける
- ・学習した内容が実践に活かされているかを確認、評価する
- ・高齢者の理解とそれに基づいた適切なケアの提供について学習することで身体拘束を行わない環境を作る

●「身体拘束」や「虐待」に対する施設・事業所の方針を明確にし周知徹底を図りましょう

- ・「やむを得ない」「しょうがない」という安易な身体拘束が、虐待であることを伝え、「身体拘束は一切行わない」方針を明確にする
- ・身体拘束を行わずに対応する方法について、組織で検討、体制を整える